

成寿山善光寺開創35周年 留学僧育英会設立20周年

曹洞宗大本山總持寺で記念式典

去る五月十日、横浜・善光寺（黒田武志住職）開創三十五周年および「横浜・善光寺留学僧育英会」設立二十周年の記念式典が、横浜市鶴見区の曹洞宗大本山總持寺で催された。檀信徒約四百人、僧侶四十人、来賓二十人ら約四百六十人が参席し、法堂（大祖堂）で記念法要が厳修され、三松閣に会場を移して記念講演、祝宴が行われた。

黒田武志住職は、無一物から出発し、〃釈尊の原点に返れ〃と叫び続けて三十五年間、檀信徒

の応援を得ながら、檀家を三千に拡大、また仏教の将来性を託すため横浜善光寺留学僧育英会

を立ち上げて二十年、その間百十人の育英僧（二十一カ国二地域）を育ててきた。

式典は最初、總持寺の法堂（大祖堂）において、伊東盛熙監院の導師により記念法要が厳修された。その後、三松閣に会場を移して、記念講演、宴会が行われた。

記念講演では、鶴見大学教授・東京大学名誉教授の木村清孝教授が「瑩山紹瑾禪師に学ぶ」と題し講演。まず自分の学生が育英会のお世話になったこと、自分の父も黒田老師とかかわりがあったことを述べて本題に入った。

木村教授は、「みんなが安らぎ、悟りへいくことができるようにしたのが大乘仏教であり、その中で瞑想・禅定、心を静める行を通して真実が現れる筋道を大切にしたのが禅宗である。その一つである曹洞宗では、大本の釈尊、日本曹洞宗開祖の道元禪師、その伝統を大衆化して広めた四代目の瑩山禪師の三人を礼拝している」

と述べて、瑩山禪師に焦点を移した。

「瑩山（紹瑾）禪師は八歳で得度、十九歳で弥勒菩薩のいる兜率天に登った、といわれる。二十二歳で、法華経の一部に触れ、私と宇宙は一つだと気づき、深い知恵を修得された。二十五歳で、知恵のまままで終わってはいけなとし、観音の大悲を自らの願いとし、どうしようもない人間をも救う願いを持った。亡くなる寸前には、悟りを實現する菩提心を転生してなお起こし続ける決意を述べている。また、伝統を守りながらも、報恩行など、現実的な問題にも対処した。それは、平常心（当り前の心）が真実そのもの、仏教の核心から出てくるものであり、みんなに悟り、平安を實現させようという菩薩の願いから出てくるものである。師のモデルは観音菩薩にあった」

最後に、一人一人が慈悲による菩薩行を行うことこそ瑩山禪師の願望であり、黒田老師も菩

薩の一人だと語って講演を締めくくった。

祝宴では、善光寺総代表・熊谷豊太郎氏によるあいさつの後、伊東監院、カルナティラカ・アムヌガマ駐日スリランカ大使、バーナガラ・ウパティッサ・スリランカ大菩薩会会長、ペルポラ・ウパッシ大僧正、神奈川県三浦市・本瑞寺住職の洞外文隆師、埼玉県飯能市の能仁寺住職の萩野映明師が祝辞を述べた。

アムヌガマ大使は、祝辞の中で、「黒田老師の仏法興隆に対する貢献、仏教研究には、私が日本に赴任する前から知っていた。留学僧育英会は仏教国をリードする若いリーダーたちを通して偉大な貢献をされている。老師こそ上座部仏教に対する深い理解を持つ最も尊敬すべき日本仏教界を代表する一人だと確信する。昨年は日本スリランカ国交樹立五十周年に当たり、黒田老師は、今年三月、八十人の友好親善使節団を率いてスリランカを訪問、世界平和祈願コロン

ボ大会で『ダルマパーラの贈り物』と題した感銘すべき講演を行った」と述べ、黒田老師の国内外にわたる活躍に賛美を惜しまなかった。

(宗教新聞より転載)

